

地域と環境

No.16 2021.3

Region and Environment

黄 崢崢：連続と相異 —1930年代と1950年代の治淮事業における比較研究— ……	1
谷口 晴彦：農業用水の水利空間と維持管理をめぐる関係性の変化 —大阪府泉北地域の光明池を事例に— ……	19
潘 藝心：中国都市における内城／インナーシティとその変容 —江蘇省無錫市を事例として— ……	31
夏目 宗幸・安岡 達仁：代官野村氏の江戸近郊支配 —武蔵国豊島郡角筈村渡辺家文書を中心として— ……	61
Yasuo KOJIMA：How to Deal with “Return to Rural Living” ……	73
Aki YAMAMURA：The Urban Landscape and Topography During the Transition Period from Medieval to Early Modern: Ejiri and Shimizu in Suruga Province as Examples ……	81
谷口 晴彦・北西 諒介：2020年人文地理学会大会のオンライン開催 に関する報告 ……	101
<hr/>	
博士論文要旨 ……	121
修士論文要旨 ……	122
研究室だより ……	128

博士論文要旨

2020年度

中国東北工業都市における 商業集積の形成と変容

劉 天 野

商業は生産側と消費側を結びつける媒介である。また、商業集積は一定の空間における商業施設・個人向けのサービス業施設などの集合である。経済と都市の発展に伴い、商業に関する政策とその環境も常に変化している。この変化はまた、商業集積の形態や分布状況に大きな影響を及ぼす。本研究は、都市経済の発展と都市空間の変容との相互関係を明らかにするため、長春市における商業集積に対して、計量的研究と記述的考察を行なった。

第1章では、日本と中国の先行研究を中心に、商業施設と商業集積に関する研究を整理し、業態に基づく研究の必要性和、商業集積を対象とする研究の位置付けを論じた。このことから、本研究の目的を明確した。

第2章では、長春市の商業施設・サービス業施設を対象として、業態に基づき、GISと回帰分析などの計量的方法を用いて、商業集積の析出に関する静態的分析を行った。商業集積に関して、商業施設とサービス業施設を同時に考察する必要性和、業態に基づく分析の利点と欠点について明らかにした。

第3章では、長春市における商業集積の形成と変容に関して、文献資料を用いて、記述的な研究を行なった。長春市の地方誌、年鑑、統計資料などに基づき、経済制度の変遷と都市計画から商業集積に対する影響を明らかにした。

第4章では、長春市の大規模タンウェイ(単位)を対象として、タンウェイの生活空間における商業集積の変遷と、その商業集積と都心部における商業集積の相互関係を利用者の視点から考察した。

第5章では、東北地域旧工業基地振興戦略の影響について、長春市における旧工業地区を対象として、商業集積の形成と変容、特に再開発による商業集積の変容に関して考察を行なった。

そして、終章では、本論文のまとめと展望について述べた。

本研究では、中国東北地域の工業都市である長春市を対象として、商業集積の分布を考察した上で、商業集積に影響を与える要因を明らかにした。長春市における商業集積の分布は一極的に集中し、商業の郊外化がみられないという特徴を有し、その要因として、買物の習慣、ブランド化の意識、アクセシビリティなどが挙げられる。また、長春市の商業集積に影響を与える主要な動因は制度と政策であることを明らかにした。

修士論文要旨

2019年度

中近世京都・東山における 参詣ルートの変遷

金澤良輔

中近世の京都・東山を対象に景観復原を行い、その都市景観の中で展開される参詣ルートの変遷を考察した。景観復原の結果、16世紀後半の縄手通と大和街道の整備が都市景観に大きな影響を与え、さらに市街地は、白河と鴨川流域の地形的悪条件を克服することで拡大し、18世紀半ばまでに面的に展開したことを明らかにした。一方で参詣ルートは、参詣曼荼羅と小型案内記を利用し、参詣のモデルコースと実際の参詣者の参詣ルートと比較した。その結果、中近世を通し、山側から鴨川沿いを通るルートに変遷し、参詣ルートは都市景観の変遷に一致して変遷すると結論付けた。また、従来小型案内記と旅人の訪問先のズレは指摘されてきたところであるが、その訪れられない寺社は全て山側に立地していた。都市景観が変化し鴨川沿いに南北道が整備されることで、山側から川沿いへと人の往来の流れが変化したため、小型案内記と実際の訪問先との齟齬が生まれると指摘した。

福島原発事故による避難者の 移動と故郷喪失

—京都府と大熊町を事例に—

藏田典子

本研究の目的は、2011年3月11日に発生

した福島原発事故による避難者の移動過程とその背景を明らかにし、移動過程から避難者の故郷喪失を解明することである。研究対象地として、京都府への避難者と大熊町を選定した。

京都府への避難パターンとして、①誘導型、②決定型、③プッシュ型、④移動型の傾向があることが明らかになった。京都府の避難者への故郷喪失の要因として、①避難過程とその背景、②避難生活の満足度、③家族関係の変化や避難を巡る意見対立が大きく影響を与えている。

全町避難となった大熊町は、学校を再開できる廃校があるといった理由から会津若松市で仮の町を実施した。早い決断と学校再開が求心力になり、一時は3,700人もの大熊町民が暮らすほど、海外を含めて広域に避難していた大熊町民は会津若松市に引き寄せられた。しかし、避難生活が長引くに連れて、住民の多くは元々住んでいた浜通りに戻るようになり、いわき市への移動が増加した。

清末民国期の中国江蘇省における 官営救済の景観

黄崢崢

本論文では、清末民国期の江蘇省を対象として、「景観」という視角を通して、1906年蘇北水害と1931年江淮大洪水に対する官営救済の解明を試みた。そのため、まず江蘇省の歴史地理環境の考察を踏まえて、1906・1931年発生した水害の性格を豪雨・浸水状況、堤防決

壊、人為的水流調整の面から明らかにした。そして、行政施設・収容施設と食糧システムという枠組みで、救済の実態を復原した。その結果、行政施設としての「施賑所」の性格、救済を中心とする権力関係の展開するシステムであることが分かった。収容施設は、①集中的に立地する、②地形上の微高地である、③救済物資の流通に便利な所である、④軍事力に近接しているなどの立地条件を指摘した。また、常設の食糧倉庫が効果を発揮しなかったことと、食糧輸送に関する免税政策の役割を明らかにした。南京の都市スケールでは、①施賑所の最も重要な特徴は警察機関を利用し救済を実施したこと、②収容施設は城門付近、城壁・甕城或いは都市周縁部にあること、③南京における緊急救済段階に、アメリカの麦は役に立たなかったことなどの特徴が示している。

「大仙台」と都市計画 一大正～戦時期仙台における 都市計画の展開と地域—

齋藤 駿介

本研究は、大正期から戦時期の仙台における都市計画の特徴と都市計画による仙台および周辺地域の変容の実態を解明することを目的として、①法定都市計画の導入と市域拡張の関係、②戦時国土計画・地方計画に基づく仙塩地方開発総合計画と都市計画の関係、③仙塩地方開発総合計画の立案と仙塩大合併の関係を、各主体（中央省庁・宮城県・仙台市・周辺町村）間の相互作用に着目しながら考察した。

これらの考察を通して、六大都市や工業都市と比較して相対的に都市計画の進展が遅れていた仙台では、①財政的問題から市域拡張や計画案の策定などの費用負担の少ない事業に焦点が当てられたこと、②それゆえ政府か

らの補助を見込める東北振興や防空などの時局の要請に呼応した事業に力を注いでいたこと、③都市計画は実際の都市空間を改変する技術としての意義以上に、将来的な「大仙台」建設という都市の将来像を提示する意義を持っていたことが明らかになった。

現代中国における農村小学校の 統廃合の実態

—城固県の事例から—

張 莎

本稿は現代中国における農村小学校の統廃合の実態解明を目的としている。中国では1990年代末頃から、分布調整政策として農村地域の小中学校の統廃合が進められ、2001年の『基礎教育の改革と発展に関する決定』により、学校数は急激に減少した。本稿では陝西省城固県における政策の実施過程とその影響を検討した上で、県内の石家庄小学校に関わる統廃合を例に、地域住民や学校関係者の反応を聞き取り調査から明らかにした。結果、城固県では統廃合が危険校舎の改造を伴って進められたことがわかり、その後の県の教育政策の前提となった可能性が指摘された。聞き取り調査では、統廃合によって学校の施設が改善されたために、住民は肯定的に受け止めていることが明らかになった。以上より、分布調整政策を推し進める県政府と、学校の設備面の改善を評価する地域住民の間には、共通の利害関係があったことがわかり、これは統廃合が円滑に進んだ1つの要因と評価できる。

マニラの人口密集地区における サリサリストアの実態

古川 貴大

本稿は、主にフィールドワークにより、再開発により急激に変化するフィリピン・マニラに属するマラテ、パコ地区のサリサリストアの実態を明らかにし、今後、大きく経済成長していくマニラの都市構造の変化について考察を行った。サリサリストアとは家族経営の小規模小売店の名称である。

フィリピンの小売業は1950年代、サリサリストアや行商人の生活を保障するためにフィリピン人の投資だけに限定されてきた。しかし、1993年に外国投資が認められたことで、現在ではコンビニエンスストア、ドラッグストアのチェーン展開が進み、サリサリストアなどの零細な小売店は減少している。また、生活用品の供給だけでなく、地域住民のたまり場、情報交換の場としての機能も報告されている。

貧困層の生活のインフラと情報交換の場としての都市におけるサリサリストアの機能は低下している。消費者の選択が増えたことで、都市における役割が失われつつあるのがマラテ、パコ地区のサリサリストアの現在である。

中近世港町の空間構造

—越前国三国湊の景観変遷—

三好志尚

中近世の港町の景観に関する先行研究では中世と近世に分けて景観をモデル化していたが、本稿では越前国三国湊を対象とし、中近世の景観変化のプロセスに迫った。その結果次のことが明らかになった。中世の三国湊は九頭竜川河口の複数の港によって構成され、内陸の複数の荘園と繋がっていた。河口に港が分立する構造は織豊政権が内陸を統一した時代にも維持された。しかし近世初期に内陸で藩や幕府領が分立し河口における港町間の競争が高まると、福井藩が自領の集落の整備・拡

張を行い、外港の振興を図った。この集落が近世三国湊として発展した港町である。福井藩が拡張した市街地は、中世以来の集落とは異なり、直線道や方形区画によって構成された。この新町は西廻海運の整備・北前船の登場により発展し、中世以来の町は主に河川舟運で内陸と結びついていたと推定される。つまり近世三国湊は異なる景観の都市空間が併存して機能していたと考えられる。

2020年度

鉄道駅と周辺地域の相互関係 に関する研究

曲新苗

本稿では、鉄道が重要な役割を果たしている現代社会の背景の下で、データ分析を通して鉄道駅と周辺地域の相互関係を考察する。

大阪府の2000年～2010年の変化を考察し、駅からの視点と地域からの視点を検討した。駅からの視点で、駅との関連性のある地域を選定する際に、駅勢圏の範囲を検討した。定められた駅勢圏とボノロイ境界を用い、典型的な工業地帯とニュータウン地域の事例研究を行った。地域からの視点で、地理空間加重回帰分析法とクラスター分析を用い、回帰分析と適切化を行い、駅との関連性のある地域の分布と変遷の実態を説明した。最後に、以上の手法を比較した。

駅からの視点で、大阪府では駅から1000mの圏域が地域と駅利用者の関係を分析する際に適切であることが分かった。それが用いられた泉北高速鉄道の例から「典型的都市型」駅が「ニュータウン型」駅より、土地利用混合度も人口数も高く、安定した成長が見られ、利用者目的の変化も均一であることが分かった。駅を比較すると、泉北ニュータウン衰退とト

リヴェール和泉ニュータウンの発展の実態が見られ、土地利用混合度、居住人口と駅利用者数が正の相関関係も見られた。ポノロイ境界が用いられた南海本線と JR 阪和線の例で、4 グループの駅で土地利用と駅利用者目的の関連性が見られた。アクセス、到着の利便性と住宅地の増加が駅の利用者に影響を及ぼすことも分かった。地域から駅を見る視点から、商業・業務用地と駅利用者数の相関関係が強まっており、特徴的な地理的分布も見られた。住宅地用地の分析から、駅と周辺地域の相関関係が物理的な境界から影響を受けることが分かった。最寄り駅からの距離と駅利用者との関係により、近隣した路線を比較できた。最後、クラスター分析で、より精度の高い回帰モデルを得られた。駅から地域を見る手法は大スケールである具体的な事例研究に、地域から駅を見る手法は小スケール分析には適切であると考えられる。

日本都市における居住系介護施設の 立地特性と周辺環境の研究

黄 拯

本研究は、大阪市と大阪府松原市の居住系介護施設を事例として、日本の都市における居住系介護施設の立地特性と周辺環境を解明することを目的とする。利用したデータは高齢者人口データ、介護施設データと都市施設データである。まず、ArcGIS 分析法を利用して、介護施設の立地特徴を分析した。次に、ジニ係数とローレンツ曲線を利用して、大阪市内の介護資源配置の公平性を研究した。最後に、各行政区の居住系介護施設の充足率、異なる居住系介護施設の周辺環境、都市部と郊外部における居住系介護施設の格差に注目して分析を行った。結果として、以下の三点が明らかになった。

第一に、居住系介護施設は高齢者人口の分布パターンに応じて、都市外縁部に分布する。その中で、介護老人保健施設と特別養護老人ホームは空間的に集積していない、一方、有料老人ホームは都市外縁部で集積パターンを示している。

第二に、日本の都市における居住系介護施設の資源配置は公平性を示しているが、しかし、都市中心部における居住系介護施設の供給は高齢者の入居需要に応じきれない。

第三に、異なる居住系介護施設の間には周辺環境の格差が存在する。具体的は、まず、有料老人ホームに比べて、特別養護老人ホームの医療へのアクセスは比較的に良好といえる。次に、特別養護老人ホームに比べ、有料老人ホームは交通の便利な場所に立地しており、周りの公共施設への接近性は比較的に良好である。また、有料老人ホームの地価に比べて、特別養護老人ホームが立地する場所の地価は比較的に高い。最後に、有料老人ホームは自然環境と文化施設の近接性の良い場所に配置されている。

上海料理の継承と変容

— 真正性からみた日本の場合 —

周 冠 雄

本研究は近代において特殊的な地理条件と社会環境を備え、大量の国内外の移民を引き寄せて、それぞれ特色のある地域文化を備えている上海を取り上げ、背景にある海派文化を顕著的なトランスローカルの進出に影響された上海料理との関係において整理し、緊密なその関係を示している。そして、上海料理について定義し、主に上海料理を本邦菜として、時空間を合わせた文化地理学における食文化の変容論という視点から、どのような要素でどのように構成されたかを考察した。

そこで、上海料理を構成する真正性の要素を項目ごとに分けたうえでさらに細分化を行い、それらの特徴を上海の真正性を構築した要素とした。社会的な変動および歴史の流れにより、上海料理は伝統を継承しながら変容し続けてきた。上海の歴史における重大な転換期に従って、上海開港前、上海開港後、中華人民共和国建国後、改革開放後から至る現在としてそれぞれ四つの時代に分けて、上海料理はどのようにそれらの真正性要素によって構築されてきたかについて時代ごとに考察する。上海における上海料理店への考察を基礎、基準として、越境した日本において逆にトランスローカルな飲食文化へと変身した上海料理について、日本における3つの上海料理店を聞き取り調査対象として考察した。

結果として日本における上海料理の真正性を構築した要素については各々差異がみられ、またいくつかの上海当地における上海料理にとって重要である真正性要素が放棄されていたことがわかった。そこで、上海における上海料理も加え、日本における上海料理の真正性はどのように、どのような要素によって構成されたかということと、上海料理が日本という異国異文化の環境にトランスローカルに進出した場合、どのような要素がどのように上海料理の真正性を再構築するかをめぐって循環可能なモデルとして成立しうる概念モデルを構築した。

地域認識における歌の役割

一近現代舞鶴を事例として一

西村 渉

本稿では、地域の歴史・地理を記す歌が、人々の地域認識において果たしうる役割について考察した。対象地域は、近現代に地域性・構造を著しく変化させてきた舞鶴とする。

舞鶴に関する歌は、「現在」の空間を地誌的に記す歌と、「過去」「現在」イメージを記す歌とに分かれる。前者には行政、後者には地域住民・団体が主に関与し、時に海軍も歌作りに介入する。実際の発信・普及は前者が優先され、後者は単発かつ小規模に留まる傾向にある。舞鶴では、変化する現実の空間認識に即したアイデンティティ形成が主に望まれ、「過去」に代表される地域イメージの追求は、地域構造の安定期に回顧的になされる。

社会との連動性、先行の歌からの独立性、地域像の時限性と更新性、人々への親和性と普及指向性は、歌に顕著な特徴である。このような地域の「現在」に応じやすく、人々への提示に適した歌が、舞鶴では有効に機能するものとして期待されたと考えられる。

近代産業の成立と地域

一何鹿郡と郡是製紙一

羽部 浩 太 朗

本稿は郡是製糸株式会社(以下郡是)と何鹿郡を対象に、近代産業と地域の関係や、これらの新たな側面について明らかにすることが目的である。郡是の設立により、何鹿郡はどのような地域を形成したのかについて形式地域、実質地域の議論をもとに研究した。

まず、何鹿郡の蚕糸業状況について把握を試みた。近世何鹿郡の蚕糸業は小規模であったが、近代では波多野鶴吉は郡振興をも見据えて大規模製糸工場郡是の設立に成功した。このような郡振興を念頭に置いた製糸工場の集蘭範囲を見ると、郡内から等しく集蘭したわけではなく、上林においてはかなり低い数値が観測された。地形的制約や近世藩領時代の結びつきもあって、上林がひとつの実質地域を形成していたためであると結論付けた。

郡という近世には意識されなかった形式地

域が近代に意味を与えられ、郡是のような郡を標榜する会社の設立をみた。しかし上林のような実質地域の強さが近代において確認できた。

研究室だより

(2019年1月～2020年12月)

2019年

・ 1月12～13日

国際シンポジウム「International workshop for the reorganization of rural settlement system」(科研基盤A「集落再編の国際比較と生活空間論による再考」研究代表者小島, 以下集落再編科研)が楽友会館(12日)と京都府南部(13日)で開催され, 教員と学生が参加。二日目の和束町等での巡検では谷口・北西が企画運営を担った。

・ 1月28～31日

高木彰彦九州大学大学院人文科学研究院教授による集中講義「地域空間論／経済空間論」が行われた。

・ 1月31日

潘は博士後期課程を修了(研究指導認定退学)した。

・ 2月2日

山村は, 三重大学歴史研究会主催『第48回三重大学歴史研究会大会歴史講演会』(於三重大学地域イノベーション研究開発拠点イノベーションホール)にて, 「近世城下町空間の形成過程」の講演を行った。

・ 2月9日

山村は, 犬山市教育委員会主催『史跡犬山城跡指定記念シンポジウム—史跡犬山城跡のこれから—』(於犬山国際観光センターフロイデ)の座談会に出演した。

・ 2月16～21日

小島は, 集落再編科研により中国・南京で南京師範大学を訪問し, 張小林教授との学術交流と講演, あわせて江南農村の巡検と

資料収集を行った。

・ 2月20日

山村の「吉田神社と共存する京都大学」が掲載された『地図で楽しむ京都の近代』(上杉和央・加藤政洋編, 風媒社)が刊行された。

・ 2月21日

山村は, 「地域空間論演習」の授業の一環として, 高砂・加古川の巡検を行った。

・ 2月24日

山村は, 放送大学福井学習センター主催公開シンポジウムにて, 「地図で読み解く越前の城下町—丸岡・大野・勝山—」の講義を行った。

・ 2月

山村の「地図と景観から歴史を読む—京大以前の吉田を探して—」が掲載された『総人・人環フォーラム』37が刊行された。

・ 3月21～22日

小島は, 集落再編科研の研究集会を箱根で開催した。

・ 3月25日

学位授与式が開催された。金澤良輔(指導教員山村)・蔵田典子(指導教員小方)・黄崢崢(指導教員小島)・齋藤駿介(指導教員山村)・張莎(指導教員小島)・古川貴大(同)・三好志尚(指導教員山村)の7名が修士学位を授与された。

・ 3月26日

卒業式が開催された。吾郷諒太(指導教員小島)・松岡宏樹(指導教員小方)・三津海童(指導教員山村)・宮内陽帆(同)・山中雄生(指導教員小島)の5名が卒業した。

・ 3月28日

2018年度巡検が、「巨椋池干拓地の管理と新旧河川を取り巻く景観」と題して行われ、淀の街並み・城下町、淀川三川合流域さくらであい館、旧木津川跡、国土交通省久御山排水機場、近畿農政局巨椋池排水機場、巨椋池まるごとミュージアム、巨椋池干拓地などを巡った。(担当：谷口晴彦)

・ 3月30日

山村は、刈谷市歴史博物館主催の開館記念関連講演会(於刈谷市歴史博物館)にて、「水野勝成と城下町—刈谷と福山—」の講演を行った。

山村の「尾張犬山城下絵図の系譜とその特性—17世紀後期における犬山城下町の空間構造—」を掲載した『近世城下絵図の景観分析・GIS分析』(平井松午編, 古今書院)が刊行された。

・ 3月31日

夏目は、武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館発行の「武蔵野ふるさと歴史館だより」第3号に「「古老が語る」消えた五日市街道の水路」を寄稿した。

・ 3月

山村の「吉田キャンパス本部構内の記念物にみる景観形成」を掲載した『京都大学キャンパスマスタープラン2018』(京都大学吉田キャンパスマスタープラン専門部会・施設部施設企画課編)が刊行された。

・ 4月1日

小島は人間・環境学研究科副研究科長・評議員に就任した。山村は教授に昇任した。

小方と小島は復旦大学歴史地理研究所の樊如森、朱海濱、路偉東3教授の京都大学訪問に際して懇談を行った。

小島の「改革開放は中国をいかに変えたのか」を掲載した『地理』(64・4)が刊行された。

山村は、三重大学大学院地域イノベーション学研究科の客員教授として博士課程の学生の指導を担当した。また、京都府立大学文学部にて、「地誌学」の非常勤講師を担当した(2019年度前期)。

日本学術振興会特別研究員に蔵田典子(DC1)、谷口晴彦(DC2)、夏目宗幸(DC2)が採用された。

・ 4月3~7日

夏目は、米国、ワシントン D.C.にて開催された「American Association of Geographers 2019 Washington, D.C. Annual Meeting」において、「An application of version control for historical GIS data」と題して発表を行った。

・ 4月5日

修士課程に小森千賀子(指導教員山村)、張鯤翼(指導教員小方)、松岡宏樹(同)、村上才門(指導教員山村)が入学した。博士課程に蔵田典子(指導教員小方)、黄崢崢(指導教員小島)、三好志尚(指導教員山村)が進学した。

・ 4月23日

『地域と環境』第15号(2018年12月)が刊行された。

・ 4月28日

山村は「地域空間論Ⅱ」の授業の一環として、近江小谷城と城下町の巡検を行った。

・ 5月22日

小島は、UNITY研究会「グローバル時代の新しい教養」において「郷村振興の文脈」と題する報告を行った。

・ 5月26日

山村は、長浜市主催長浜市歴史文化基本構想策定事業歴史講演会(於セミナー&カルチャーセンター臨湖)にて、「城下町の中世から近世—小谷城下から長浜城下へ—」の講演を行った。

神戸女子大学教育センターで開催された

兵庫地理学協会 2019 年度春季例会において、以下の発表が行われた。谷口晴彦「国・都道府県スケールから捉える農業用水の維持管理—大阪府泉北地域の光明池土地改良区を事例に—」。

・ 6月1日

山村は、京大オリジナル株式会社主催の小学校高学年～中学生向け『京大探求講座』において、「地図から読む歴史」の講義を行った。

・ 6月2日

山村は、「地域空間論Ⅱ」の授業の一環として、長浜城下町の巡検を行った。

・ 6月28日

谷口は、京都大学人間・環境学研究所 2019 年度前期教養教育実習に参加し、人文地理学各論Ⅱ（村落）において、京都大学の学部生を対象にした授業を行った。

・ 7月5～7日

潘は、中国・青島で開催された山東省 2019 青年学者泰山国際フォーラムに参加し、7月6日に以下の発表を行った。潘藝心「山東半島城市群の構造と展望」（原題：「山東半島城市群の構造与展望」）。

・ 7月13日

キャンパスプラザ京都で開催された人文地理学会第 155 回歴史地理研究部会において、以下の発表が行われた。北西諒介「高岡市における旧町名復活と地名の位置づけ」。

・ 7月20日

山村は、株式会社フロムページ主催高校生向け大学案内イベントの『夢ナビライブ 2019』（名古屋会場、於ポートメッセなごや）にて、「今に生きる名古屋城下町」の講義を行った。

・ 7月25日

三好は、四條畷学園中学校の京都大学総合人間学部訪問において、「都市と港の歴史

地理」と題して研究紹介を行った。

・ 7月27～28日

小島は、集落再編科研による臨地研究会を鳥取大学で筒井一伸鳥取大学教授の企画運営で開催した。

・ 7月27日

イスラエル工科大学の Sagi Dalyot 助教が研究交流のため研究室を訪問し、勉強会を行った。夏目は「Reconstruction of Landscape and Wind Environment of the 19th Century Rural Village in Japan (American Association of Geographers 2018 の発表と同内容)」と題して発表を行い、意見を交換した。

山村は、宮の渡し・大瀬子地区まちづくり協議会（名古屋市熱田区）主催の講演会（於白鳥コミュニティセンター）にて、「熱田の歴史地理—リメンバーブラタモリ名古屋・熱田編—」の講演を行った。

・ 7月30日～8月5日

黄崢崢は、山西大学・太原で開催された第 3 回「災害と歴史」研修班に参加し、8月3日に以下の発表を行った。黄崢崢「救済景観と近代地形図の活用—1931 年江淮大水害における南京救済を例に—」（原題：「救済景観と近代地形図の活用—以 1931 年江淮大水災南京救済为例—」）。

・ 8月4～6日

小島は、筑波大学大学院人文社会科学部で「歴史地理学特講ⅢA」の集中講義を行った。

・ 8月4日

山村は、「地域空間論Ⅱ」の授業の一環として、近江坂本の巡検を行った。

・ 8月9日

山村は、京都大学オープンキャンパス 2019 時計台企画講演会にて、「地図から読む歴史」の講演を行った。

・ 8月25日～9月3日

小方は、フェニキア・カルタゴ研究の一環としてスペインで調査を行い、ドーニャ・ブランカ、カデイス、カルタヘナなどの都市遺跡・歴史的都市を訪れた。

・ 8月31日

三好は、人文地理学会の第156回歴史地理研究部会（於京都大学）において「中近世港町の空間構造—越前国三国湊の景観変遷—」と題して発表を行った。

・ 9月2日

夏目の「Wind Condition Analysis of Japanese Rural Landscapes in the 19th Century: A Case Study of Kichijoji Village in Musashino Upland」を掲載した ISPRS Int. J. Geo-Inf. 8(9)が刊行された。本論文は、9月号カバー・ストーリーに採択された。

・ 9月14日

山村は、向日市埋蔵文化財センター主催令和元年度市民考古学講演会（於向日市文化資料館）にて、「地図から読む戦国西岡の城館—桂川用水と物集女城—」の講演を行った。

・ 9月17～19日

小島は、集落再編科研による韓国研究会を金料哲岡山大学教授の企画運営により開催した。

・ 9月18日

夏目は、愛知県立大学にて開催された第3回「歴史地理学サマーセミナー」において、「古老たちの証言に残る水路伝承に関する複眼的考察」と題して発表した。

・ 9月

秋季卒業式が開催された。高間智子（指導教員山村）が卒業した。

・ 10月1日

松田隆典滋賀大学教育学部教授が「地域空間論Ⅳ／経済空間論」の非常勤講師を担当した。

・ 10月7日

小島の「中国四川の散居と文化—オルターナティブとしての院子的居住—」が掲載された BIOCITY（80号）が刊行された。

・ 10月18～21日

岡山県岡山市岡山大学で開催された“The 14th Japan-Korea-China Joint conference on geography”において以下の発表が行われた。HUANG Zhengzheng “Landscapes of Disaster Relief in the 1931 Yangzi-Huai River Flood”. Noriko KURATA “Hometown Loss Process Caused by the Fukushima Nuclear Accident Focus on Evacuees to Kyoto and Evacuees from Okuma-machi”. Ryosuke KITANISHI “Motive for Changing Place Names in Takaoka City, Toyama, Japan”.

・ 10月19～20日

新潟大学にて開催された日本地理学会の2019年「秋季学術大会」において、以下の発表が行われた。根元裕樹・夏目宗幸「Leaflet を用いた WebGIS 作成教材および作成システムの開発」本発表は、ポスターセッション賞を受賞した。

徳島大学にて開催された第28回「地理情報システム学会研究発表大会」において、以下の発表が行われた。夏目宗幸・根元裕樹「GIS を用いた民俗学研究との対話—水路に関する口頭伝承の分析」。本発表は、若手分科会優秀発表賞を受賞した。QU Xinmiao・夏目宗幸「鉄道駅と園周辺地域の相互関係に関する研究—泉北高速鉄道を例に—」

・ 10月24日

山村は、歴史的景観都市協議会主催の第47回歴史的景観都市協議会総会（於 Hotel & resorts NAGAHAMA）にて、「地域環境からみた城下町の個性—小谷から長浜へ—」の講演を行った。

・ 10月25～29日

科研基盤A「古道・関塞遺址調査に基づく前近代中国主要交通路の研究」（研究代表者

辻正博教授, 以下関塞科研)による中国陝西省・内モンゴル自治区における古道調査に小方と小島が参加。

・ 11月2日

山村は、小牧市・小牧市教育委員会主催の令和元年度小牧市歴史講座（於小牧市まなび創造館）にて、「地図から考える尾張の戦国城下町と小牧」の講演を行った。

・ 11月3～4日

山村は、「地域空間論演習Ⅱ」の一環として、岐阜駅前、尾張起宿・萩原宿、尾張末盛城、清須城下町の巡検を行った。

・ 11月13日

2019年度京都大学高大連携事業の学びコーナーディネーターにて、藏田は奈良県立青翔高校で授業を行った。

・ 11月16～18日

関西大学千里山キャンパスで開催された2019年人文地理学会において、以下の発表が行われた。松岡宏樹「豊川下流域における古代・中世前期の交通路」・齋藤駿介（2018年度修了）「戦間期仙台における都市計画の導入と市域拡張—都市計画と「大仙台」構想の関係—」。三好は特別研究発表において書記を務めた。また、同大会内にて、阿部美香の著作『歌川広重の声を聴く—風景への眼差しと願い—』（京都大学学術出版会、2018年）が学術図書部門奨励賞を受賞した。

・ 11月16日

中国・海南師範大学で開催された災害史専門委員会第十六回年会及び「中国災害研究七十年」国際学術研討会において、以下の発表が行われた。黄崢崢、「清末期における江蘇省の救済の景観」（原題「清末期的江蘇省救済景観」）。

・ 11月23日

山村は、岐阜市教育委員会主催の『道三学フォーラム（第13回信長学フォーラム）』

（於 じゅうろくプラザホール）におけるパネルディスカッション「道三のまちと城をめぐる」に、パネリストとして出演した。

・ 11月30日～12月1日

立命館アジア太平洋大学で開催された17th Asia Pacific Conferenceにおいて、以下の発表が行われた。KURATA Noriko「Movement of evacuees by Fukushima nuclear accident.」

・ 11月30日～12月2日

小島は集落再編科研による静岡研究集会を中條暁仁静岡大学准教授の企画運営で開催した。

・ 12月1日

夏日は、武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館発行の「武蔵野ふるさと歴史館だより」第4号に「遠山景光と千町野開発」を寄稿した。

・ 12月8日

山村は、甲賀市教育委員会主催『令和元年度水口岡山城歴史フォーラム 水口・伊賀上野・亀山の城と城下町』（於甲賀市碧水ホール）にて、「織豊期から近世初期の城下町」の講演を行った。また山村は、午前中に「地域空間論演習」の一環として、水口城下町・水口宿の巡検を行った。

・ 12月14日

関塞科研の国際シンポジウムが京都大学で開催され、小島は「関塞としての秦嶺」と題した報告を行った。

・ 12月

山村の「地形図から読む京都」が掲載されたNew Shakaika1（東京書籍編集）が刊行された。

2020年

・ 1月

論文英文化プロジェクトでSara Kangハーバード大学大学院生を招聘。Sara氏は北西・三好と共同で論文翻訳にあたった。

山村の「城下町の空間的多様性の理解に向けて一尾張犬山を事例として一」を掲載したふびと 71 が刊行された。

・ 2月11日

山村は、「地域空間論演習Ⅱ」の授業の一環として、近江永原御殿と草津宿の巡検を行った。

・ 2月23日

山村は、NPO なごや歴史まちづくりの会フォローアップ委員会主催『なごや歴史まち連続セミナー Vol.1』(於名古屋都市センター)にて、「地図と景観から読む熱田」の講演を行った。

・ 2月24日

山村は、清須市教育委員会主催『清須市文化財講演会』(於清須市清洲市民センター)にて、「地図から考える濃尾平野の城・町・川―清須城下町を中心に―」の講演を行った。

・ 2月29日

石田は研修員を辞退した。3月1日より山東師範大学外国語学院外籍講師として着任。

・ 3月9～13日

日本学術振興会主催の第12回HOPEミーティングで、藏田は日本代表に選出された。(コロナ禍の影響により中止)

・ 3月23日

コロナ禍の影響により、京都大学令和元年度大学院学位授与式が中止となった。曲新苗(指導教員小方)・黄拯(指導教員小島)・周冠雄(同)・西村渉(指導教員山村)・羽部浩太朗(同)の5名が修士学位を授与された。

・ 3月24日

コロナ禍の影響により、京都大学令和元年度卒業式が中止となった。油田昇太(指導教員小島)・上田航平(指導教員山村)が卒業した。

・ 3月27～29日

駒澤大学で開催される予定だった日本地理学会2020年春季学術大会(開催中止・発表成立扱い)において、以下の発表が行われた。小島泰雄「農村変化と集落再編を形態論から考える」(発表要旨を公開)。谷口晴彦「農業水利施設の維持・利活用をめぐる行政と土地改良区の関係―大阪府泉北地域における災害対策の取組を事例に―」(発表要旨を公開)。

・ 3月31日

夏日は、武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館発行の「武蔵野ふるさと歴史館だより」第5号に「堀江家文書にみる吉祥寺村」を寄稿した。

・ 4月1日

小島は、人間・環境学研究科長・総合人間学部長に就任した。山村は、地球環境学堂の流動教員として、歴史地理文化論分野の教授に就任した。

人文学連携研究者として阿部美香が着任。日本学術振興会特別研究員に三好志尚(DC2)が採用された。

・ 4月7日

コロナ禍により学部・大学院の入学式が中止となった。修士課程に油田昇太(指導教員小島)・上田航平(指導教員山村)・王韻堯(指導教員小方)・関薇(同)・小出桂矢(指導教員山村)の5名が入学した。

・ 4月27日

2020年度前期地域空間論演習の初回および研究室オリエンテーションがMicrosoft Teams(オンライン会議)にて実施された。2020年度の大学院演習は全ての回でMicrosoft Teamsを使用した。(Microsoft Teams 運用管理者: 谷口晴彦・北西諒介・夏目宗幸)

・ 5月29日

夏目の「武州多摩郡吉祥寺村の地割復原－寛文4年検地帳に基づく機械的作図の結果と考察－」が掲載されたGIS－理論と応用(28巻1号)が刊行された。

・ 5月25日

劉天野が博士(人間・環境学)の学位を授与された。9月より西安交通大学人居環境与建築工程学院, 人居環境科学与技術研究所に就職。

・ 5月

歴史地理学会第63回大会にて以下の発表が行われた。藏田典子「山口鷲の舞における頭屋制度の変遷とその特徴」

・ 6月6日

小島は集落再編科研のシンポジウム「農村変化と地理学－地域運営組織をめぐって－」をオンラインで開催した。

・ 6月

山村の「駅は都市の中心か, 周辺か」が掲載されたNew Shakaika2(東京書籍編集)が刊行された。

・ 7月1日

夏目と安岡達仁の共著論文「職能武家集団の移住にみる千町野開発の意義と実態」が掲載されたE-journal GEO(15巻2号)が刊行された。

・ 8月

山村は, 京都大学オープンキャンパス2020総合人間学部紹介において, 「地図から読む歴史」の授業動画を公開した。

・ 9月14～17日

門井直哉福井大学教育学部教授が「地域空間論V/歴史地域論」の集中講義を行った。(コロナ禍のためオンライン開催)

・ 9月30日

山村の「湊町酒田の歴史的景観」が掲載された『山居倉庫 文化財調査報告書』(酒田市教育委員会編)が刊行された。

・ 10月3日

小島は「地域空間論演習Ⅰ」の授業の一環として福知山巡検を実施した。

・ 10月9日

山村の「島原半島の戦国城郭と港町－地図から読む大名の地域経営－」と『島原大變』と島原城下町」が掲載された『古地図で楽しむ長崎』(大平晃久編, 風媒社)が刊行された。

・ 10月10日～11月22日

オンラインにて開催された日本地理学会の2020年「秋季学術大会」において, 以下の発表が行われた。根元裕樹・夏目宗幸「Leafletを用いたWebGIS作成教材の拡充と図形スタイル作成ツールの開発」

・ 10月15日

山東大学・済南で開催された第5回山東大学齊魯青年フォーラムにおいて, 以下の発表が行われた。潘藝心「中国都市史と中国都市内城インナーシティ研究」(原題「中国城市史与中国城市内城研究」)。

・ 10月16日

山村は「地域空間論演習Ⅱ」の授業の一環として, 四条～三条間の河原町・木屋町, 四条烏丸・中世下京巡検を実施した。

・ 10月19日

藏田は2020年度京都大学高大連携事業の学びコーディネーターにて, 奈良県立畝傍高校へオンライン授業を配信した。

・ 10月23～25日

オンラインで開催された第29回地理情報システム学会研究発表大会において, 以下のポスター発表が行われた。張鯤翼・小方登「京都市における観光ネットワークの空間構造に関する研究」。根元裕樹・夏目宗幸「Leafletを用いたWebGIS作成システムの改良」

・ 10月27日

藏田は 2020 年度京都大学高大連携事業の学びコーディネーターにて、岐阜県立多治見北高校へオンライン授業を配信した。

・ 10月30日

山村は「地域空間論演習Ⅱ」の授業の一環として、尾張小牧宿・城下町巡検を実施した。

・ 11月14～23日

2020年人文地理学会大会がオンラインで開催された。3名の教員と北西・谷口・夏目の院生3名がタスクフォースとして運営にあたった。同大会では、以下の発表が行われた。谷口晴彦「農業用水の維持管理をめぐる水利空間と関係性の変遷—大阪府泉北地域の光明池を事例に—」（YouTubeに発表動画を公開）。

・ 11月16日

藏田は 2020 年度京都大学高大連携事業の学びコーディネーターにて、埼玉県立川越高校へオンライン授業を配信した。

・ 11月22日

山村は「地域空間論演習Ⅱ」の授業の一環として、山科巡検を実施した。

・ 11月29日

山村は、たつの市立龍野歴史文化資料館主催『龍野城下のたたずまい展記念講演会』（於たつの市立中央公民館）において、「地図から考える龍野城下町」の講演を行った。

・ 12月2日

山村は「地域空間論演習Ⅱ」の授業の一環として、長岡京巡検を実施した。

・ 12月13日

小方と小島は関塞科研の太宰府巡検に参加した。

・ 12月

山村の「市役所の歴史地理—なぜ、そこに役所があるのか—」が掲載された New Shakaika3（東京書籍編集）が刊行された。

地域と環境 No.16 2021.3

編集・発行 「地域と環境」研究会
京都大学大学院人間・環境学研究科
文化・地域環境論講座 地域空間論分野
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
TEL. 075-753-2894 FAX. 075-753-7856

発行日 2021年3月28日

Region and Environment

No.16 March 2021

Continuity and Change: A Comparative Study between the 1930s' Huai River Engineering Plan and the 1950s' Huai River Control Plan Zhengzheng HUANG	1
Changes in Irrigation Network Systems and the Relationship in the Maintenance of Agricultural Water: A Case Study of Koumyou-ike in Senboku Region, Osaka Haruhiko TANIGUCHI	19
The Chinese "inner city" in China City and its transformation: A case study on the city of Wuxi in Jiangsu Province Yixin PAN	31
Governance of the Edo suburbs by the Daikan Nomura family: From the archives of the Watanabe family, Tsunohazu Village, Toshima County, Musashi Province Muneyuki NATSUME and Michihito YASUOKA	61
How to Deal with "Return to Rural Living" Yasuo KOJIMA	73
The Urban Landscape and Topography During the Transition Period from Medieval to Early Modern: Ejiri and Shimizu in Suruga Province as Examples Aki YAMAMURA	81
The Report of the 2020 Annual Meeting of the Human Geographical Society of Japan held online Haruhiko TANIGUCHI and Ryosuke KITANISHI	101
<hr/>	
Summary of Doctor's Thesis	121
Summary of Master's Thesis	122
News	128
